

日本・中国を問わず、古典に親しみ、
俳諧に絵画に、自在なる境地を志向した蕪村の
明治・大正期に刊行された価値ある研究書を集成。

蕪村研究資料集成 全17巻



■ 監修

久富 哲雄
谷地 快一

クレス出版

『蕪村研究資料集成』 刊行にあたって

東洋大学短期大学助教

谷地 快一

李白・杜子美を誘って俳諧に遊び、上田秋成に「かな書きの詩人」と評された與謝蕪村は、「詩中画あり、画中詩あり」と讃えられた盛唐の詩人王維を理想とした画家でもあった。池大雅と並び称される画人蕪村が、いつ、いかなる師について絵を学びはじめたかは明らかにし得ないが、俳諧は、京都から江戸に戻って本石町に夜半亭を結んだ早野巴人に学んでいる。

師の没後は関東東北を遊歴して、宝暦元年（一七五一）には画家としての地盤を京都に求め、やがて巴人の高弟望月末屋が没すると、京都において夜半亭を継ぎ、画俳一致の世界をめざす。すなわち、「俳諧に門戸なし」という巴人の教えに従い、日本・中国を問わず古典に親しみ、俳諧に絵画に、自在なる境地を求めたのである。

天明三年（一七八三）十二月二十五日、蕪村が没すると、門人高井几董によって「夜半翁終焉記」が執筆され、翌年刊行の追善集、『から檜葉』に収められた。評伝はその後、大伴大江丸・橋南谿・佐藤坦・田能村竹田・寺村百億らの編著や碑文に語り継がれ、出自について謎を深める結果をもたらした。作品では天明四年（一七八四）に『蕪村



句集』、文化十三年（一八一六）に『蕪村翁文集』が刊行され、『蕪村発句解』の著者岩間乙二をはじめとする根強い読者はいたものの、江戸時代の蕪村研究はさほどの深まりは見せなかった。明治時代に入ると、俳句革新をめざす正岡子規が蕪村を称揚したことから、俳壇は蕪村宗と評されるほどの賑わいを見せた。それは、学ぶべきは芭蕉にありという芭蕉顕彰の時代に生きながら、尊敬すれども美化はせずという態度を堅持した蕪村の磊落な近代的精神と無縁ではない。以後、大正時代にわたり水露露石の発句研究、水島重治による「北寿老仙をいたむ」の紹介、乾猷平や頼原退蔵の伝記・作品研究など、めざましい成果を得ることになる。

子規による古典俳句研究が明治二十六年（一八九三）刊行の『懶祭書屋俳話』にはじまるとすれば、近代における蕪村研究の歴史も百年の歳月を経たことになる。ここに明治・大正期の蕪村研究の中から、今なお価値を失わない稀覯本を集成した本書が、研究者および俳句作者の賛同を得て、俳文芸のあらたな展望をひらく一助となるならば、これに過ぎる喜びはない。

● 推薦の言葉

『蕪村研究資料集成』を推す

お茶の水女子大学名誉教授
文学博士

井本 農一

芭蕉の研究はすでに江戸時代からたくさんあるが、蕪村についての研究はほとんど明治時代以後である。明治時代が蕪村を再発見したとも言えよう。そうして、それらの研究の多くは当時の俳句の創作と結びついている。典型的な例が正岡子規とその一派による研究で、蕪村の研究によって新しい俳句の発展に資そうとしている。

子規が芭蕉よりも蕪村を高く評価して、蕪村の文学的特質を論じ、さらに蕪村俳句の評釈を一門と共に進めたのは、自分の主唱する写生説の支柱として蕪村を考えたからであろう。蕪村が写生的であったかどうかはともかく、子規によって蕪村に新しい脚光が当てられ、そこから蕪村研究が活澁になったことは疑いない。また、子規が蕪村研究によって、俳句革新運動、すなわち俳句の近代化の支えを得たことも確かである。蕪村研究が明治時代に始まり、それも俳句の創作と関連して進んだと言う所以である。

明治中期から活澁になった蕪村研究は、着々と深化し、大正期には更に作家研究や文献学的研究や評釈等が盛んになり、今日の蕪村研究の基礎が作られて行った。勿論現代の蕪村研究は昭和戦前の研究成果を基礎にしているが、そのまた基礎は、明治・大正の研究である。とすれば、現代の研究も、明治・大正を顧みることが王道であろう。しかし、江戸時代の芭蕉研究の成果は今日多く翻刻されているのに、蕪村の明治・大正期の研究成果は今日入手が甚だ困難である。

今般久富哲雄・谷地快一両氏の監修の下に、明治・大正期の蕪村研究書を網羅して復刻する『蕪村研究資料集成』が企画されたことは、正に学界待望の慶事である。両氏のこの種の仕事の綿密丁寧さには定評がある。前述のとおり、俳句の近代化が蕪村研究に負う点から見て、学界のみならず、俳壇を含めて、汎く江湖諸氏に推したい集成である。

意義ある出版 『蕪村研究資料集成』

東洋大学短期大学名誉教授
文学博士

村松 友次

芭蕉の研究は彼の没後すぐはじまった。発句集・連句集・文集・伝記等の集および研究は、江戸時代にすでに、月並な表現であるが汗牛充棟というありさまであった。

これに対して俳人としての蕪村は決して軽んぜられていたわけではないが、書物としてまとめられたものは、几董編『蕪村句集』（天明四年～一七八四）刊）、几董著『付合てびき蔓』（天明六年～一七八六）刊）、『蕪村七部集』（文化五年～一八〇八）刊）、『蕪村翁文集』（文化十三年～一八一六）刊）、松窓乙二著『蕪村発句解』（天保四年～一八三三）刊）ぐらいである。

蕪村についての著書が爆発的に書かれるようになったのは明治になってからである。その点は芭蕉の場合と大いに異なる。その意味で今回のこの資料集成の意義は大きい。

明治・大正期を通じて、蕪村俳句に最も精力的に取り組んだのは、明治三十一年二月二十八日刊『ホトトギス』一卷十四号から載り出した「蕪村句集講義」である。これは蕪村遺稿にまで及んで明治三十九年九月一日刊九卷九号で完結する。子規・鳴雪・虚子・碧梧桐らの論戦が面白い。虚子と碧梧桐の傾向の相違もこの論戦の中でよくわかる。そのホトトギス陣営に対して木村架空がいちいちイヤモンをつけたり、からかったりする『蕪村夢物語』がまた面白い。虚子対碧梧桐では虚子は芭蕉に、碧梧桐は蕪村に惹かれて行った。碧梧桐は遂に『畫人蕪村』の労作まで残した。後の研究者のために貴重な資料を精査し年次考証を確実にしてくれたのは乾猷平の『蕪村の新研究』蕪村と其周囲である。不朽の労作と言ってよいであろう。

これらを含めた総計約三十冊八千数百ページが、古本屋探しをせずに全部まとめて目の前に現れるのである。ありがたいことである。

『蕪村研究資料集成』全17巻構成

伝記・俳論 1

與謝蕪村

●大野洒竹著／春陽堂／明治30年

俳諧講演集

●筑波会編／金港堂書籍／明治38年

日本俳諧史

●池田秋旻編著／日就社出版部／明治44年

俳人蕪村

●彌祭書屋主人著／ほととぎす／明治32年

伝記・俳論 2

水落露石遺文 馳蛙亭雜筆

●水落露石著／私家版／大正10年

伝記・俳論 3

俳諧一家言 蕪村その他

●岡野知十著／郊外社／大正13年

蕪村の新研究

●乾猷平著／大阪毎日新聞社／大正14年

伝記・俳論 4

畫人蕪村

●河東碧梧桐著／中央美術社／大正15年

蕪村と其周圍

●乾猷平著／大阪毎日新聞社／大正15年

作品研究 1

増訂 蕪翁句集 上・下

●松窓乙二註釈／萬卷堂／明治29年

頭註 蕪翁句集拾遺

●秋声会編／萬卷堂／明治30年

校註蕪村全集

●阿心庵雪人編／上田屋書店／明治30年

作品研究 2

夜半亭蕪村句解の緒

●三森伊四郎編／明倫社／明治30年

蕪村遺稿

●水落露石編／鹿田松雲堂／明治33年

蕪村俳句評釋

●佐藤紅緑著／大学館／明治37年

作品研究 3

蕪村七部集俳句評釋 春夏、秋冬

●内藤鳴雪著／大学館／明治39年

作品研究 4

標註 蕪村俳句全集

●岩本梓石編著／すみや書店／明治39年

續蕪村俳句評釋

●寒川鼠骨著／大学館／明治41年

作品研究 5

蕪村句集講義 蕪村遺稿講義 春之部

●高浜清編／靑山書店／大正3年

作品研究 6

蕪村句集講義 蕪村遺稿講義 夏之部

●高浜清編／靑山書店／大正3年

作品研究 7

蕪村句集講義 蕪村遺稿講義 秋之部

●高浜清編／靑山書店／大正3年

作品研究 8

蕪村句集講義 蕪村遺稿講義 冬之部

●高浜清編／靑山書店／大正3年

作品研究 9

蕪村夢物語 春の部

●木村架空著／日本学術普及会／大正6年

作品研究 10

蕪村夢物語 夏の部

●木村架空著／日本学術普及会／大正9年

作品研究 11

蕪村夢物語 秋の部

●木村架空著／日本学術普及会／昭和2年

作品研究 12

蕪村夢物語 冬の部

●木村架空著／日本学術普及会／昭和2年

作品研究 13

校註 蕪村俳句全集

●長谷川零餘子／日本評論社／大正10年

古人を説く

●荻原井泉水著／聚英閣／大正13年

蕪村乃俳諧学校

●乾木水解説／書畫珍本雜誌社／大正13年

評釋 蕪村の名句

●吉田冬葉著／資文堂書店／大正15年

召波居士 蕪村翁の墨蹟

●田中常太郎／私家版／大正8年

内容見本 伝記・俳論3 『蕪村の新研究』 乾猷平著

蕪村新誕生地論

蕪村は一體誰の子で、何處で生れた人か

此の間或處で『與謝蕪村は一體誰の子で、何處で生れた人だ』といふ話が出た。蕪村の出身の頗る不明瞭であることは、今更らの事ではないが、それでも其處に居合はせた數寄者(?)達は、皆な自分々々の考へを種々云つてみた。併し結局分らない事は分らないので『矢張り分らない』といふ事になつて終りを告げた。

一體、我國の有名な講家文人で、出身、家系、生活などの不明な人が甚だ少くない。これは傳記文獻上の非常な缺陷であつて誠に遺憾なことである。外國などは、有名な詩人、文藝家で、さういふ人はまづ滅多にはない事だ。然るに我國のそれらの人で不明瞭なのが頗る多いのは、一にその當時、文藝や繪畫などが世間に認められてゐながら、其作家の社會上の位置が一般に輕視されてゐた爲めで、繪かき、作

蕪村新誕生地論

三

蕪村新誕生地論

四

者の書いたものは、かなり賞翫されたはされても實際は一種の慰みもの以上に出でなかつたから、誰でも斯ういふ作家達の家系、經歷、生活などに餘り注意を拂はなかつた。従つて彼等の出身などは、餘程いゝ動機でもないに何等記録に残されてなかつたから、今に傳はらないのである。

こんなのは蕪村翁ばかりではない。我國近代文藝復興に有力であつた淨瑠璃の近松や、俳諧の芭蕉や、そんな人達の出身も頗る不明である。芭蕉は伊賀上野在の農家の出であり、藤堂家の臣であるといふけれども家系に信ず可からざる點がある、藤



『蕪村研究資料集成』（全17巻）

中解題、解説

各巻に谷地快一執筆稿を付載します。

中造本体裁

A5判／上製函入／クロス装

中配本予定、定価（分売不可）

伝記・俳論1〜4、作品研究1〜4 全8巻

一九九三年九月末日刊

揃定価九四、七六〇円（本体九二、〇〇〇円）

作品研究5〜13 全9巻

一九九四年一月末日刊

揃定価九六、八二〇円（本体九四、〇〇〇円）

全17巻揃定価一九一、五八〇円

（本体一八六、〇〇〇円）

◆国文学関係書籍の御案内

芭蕉研究資料集成

全20巻 久富哲雄監修・解題

俳諧の世界のみならず、日本文学全体に多大な影響をおよぼした芭蕉の没後三百年を記念し、人物作品の価値ある研究書を集成。

明治篇全9巻

揃定価一〇九、一八〇円（本体一〇六、〇〇〇円）

大正篇全11巻

揃定価一五四、五〇〇円（本体一五〇、〇〇〇円）

西鶴研究資料集成

全8巻 竹野静雄監修・解説

江戸時代の浮世草紙作者・俳諧師井原西鶴の没後三百年を記念して、明治大正、昭和初期に発表された資料約三五〇点を纏めて刊行。

予定価一二九、七八〇円（本体一二六、〇〇〇円）

復刻 俚言集覽 自筆稿本版

全11巻 太田全斎編 ことわざ研究会監修・解題

江戸時代の代表的な三大国語辞書の一つ『俚言集覽』の唯一の稿本を『移山伊呂波集』とともに復刻。活字本にはない書き込み等も多く、研究者に新たな資料を供与する。

揃定価一五四、五〇〇円（本体一五〇、〇〇〇円）

影印 仮名 錦繡段・三體詩・古文真寶

久富哲雄編・解題

江戸期に刊行された貴重な振仮名つき漢詩文集を復刻、『錦繡段』『三體詩』は、天和版と元禄版の二種類を収録。近世の文学作品読解の参考となる文献集。定価一〇、三〇〇円（本体一〇、〇〇〇円）